〔研究ノート〕

カントの諸空間一般（5）承前

瀬　戸　一　夫

第 17 節　自分自身を見出す或る一定の直観様式

カントは空間をどのように特徴づけているのだろうか。本研究の中心テーマであるこの基本事項を、原理論第 1 部の感性論に立ち返って、より慎重に確認することにしたい。かれはその第 1 節（§ 2）で次のように述べている。

1.Der Raum ist kein empirischer Begriff, der von äußeren Erfahrungen abgezogen worden. Denn damit *gewiße Empfindungen* auf etwas außer mich(1＊)bezogen werden,（d.i. auf *etwas* in einem anderen Orte des Raumes, als darinnen ich *mich* befinde), imgleichen damit ich *sie* als außer-und neben(＊2)einander, mithin nicht bloß verschieden, sondern als in verschiedenen Orten vorstellen könne, dazu muß die Vorstellung des Raumes schon zum Grunde liegen. Demnach kann die Vorstellung des Raumes nicht aus den Verhältnissen der äußeren Erscheinung durch Erfahrung erborgt sein, sondern diese äußere Erfahrung ist selbst nur durch gedachte Vorstellung allererst möglich（A23/B38).

（＊1）G.S.A.Mellin: mir.

（＊2）„und neben“ fehlt in A.

1. 空間は外的な諸経験から抽象された経験的概念ではない。というのも、或る諸感覚がわたしの外部に向かって何かに（すなわち、わたしが自分自身を見出すのとは別の或る空間的場所に在る何かに）結びつけられるためには、同じくまた、わたしがそれら〔何かと自分自身〕を、互いの外に、かつ相並ぶようにして〔第二版で追加された表現〕、それゆえ単に異なっているだけではなく、互いに異なる〔2つの〕場所に表象できる〔思い浮かべることができる〕ためには、すでに空間の表象が根底になければならないからである。したがって、空間の表象は経験をつうじて外的現象の諸関係から借用されているのではなく、むしろ当の外的経験さえ、考察されている表象〔今ここで考察中の空間表象〕によってのみ初めて可能なのである。

G・S・A・メリンの校訂案では、多くの場合に3格支配の前置詞「～の外に außer」に続く4格の《mich》が、3格の《mir》に変更される。しかしながら、この前置詞に4格が後続すると、運動の方向を示す用法になるため、外部に向かって何かに「結びつけられる bezogen werden」とも読める。ちなみに、メリンの読み方では、外の何かだけが主題化され、わたし自身の側は自明化されるため、或る諸感覚を外部に向かって結びつける側の主観（わたし）が、少なくとも空間的には主題化されないことになる。

次に、引用する際に斜体で強調した代名詞《*sie*》がどの語を指しているのか、この点については可能性をすべて洗い出す慎重な検討が求められる。文脈に従うと、この代名詞は「何か etwas」を指していると考えたくなるけれども、代名詞《sie》は女性・単数の名詞（句）か、または複数形の名詞（句）しか指せない。このため、性・数一致の原則に従うと、最後に残る候補は「或る諸感覚 gewiße Empfindungen」に絞り込まれることになる。しかし、もしもこれが妥当な読み方であるなら、或る複数の感覚が「互いの外に、かつ相並ぶようにして」互いに異なる複数の場所にそれぞれ表象できると、カントが主張していることになってしまう。この「かつ相並ぶように *und neben*einander」は、かれが第二版で、おそらくは誤解の余地をなくすために補足した表現である。そこで、虚心坦懐に、まずは考えてみたい。たとえば、赤熱した金属片が眼の前に在り、赤さと熱さという複数

の感覚を受けとっている――赤くて熱いと感じている――としよう。この場合、諸感覚に相当する「赤さ」と「熱さ」は、カントによると「互いの外に、かつ相並ぶようにして」互いに異なる複数の場所に、それぞれ表象できるということになりかねない。かれがそのように理解していた可能性はまずないだろう。

では、他に見落とされている候補はないか、考えてみる価値はあるに違いない。諸感覚が結びつけられるのは、わたしの外に在る「何か etwas」である一方、それが在るのとは別の場所に、対象化された「自分自身を、わたしは見出す ich mich befinde」と明確に述べられている。ここから分かるように、問題の代名詞《sie》は、何かと自分自身の両者を共に――したがって当然のことながら 2 つの対象を同時に――指していたのである。だからこそ、何かと自分自身は「互いの外に、かつ相並ぶようにして」互いに異なる複数の場所に、それぞれ表象されうるのである。「諸対象に関わるのではなく、われわれが諸対象について認識する仕方に、それがア・プリオリに可能であるべきかぎりで一般に関わる認識すべてを、わたしは超越論的と呼ぶ」(B25: 強調点省略)。カント認識論の基本は、かれ自身がこれほど明確に語っているとおり、諸対象だけではなく、われわれが諸対象について認識する仕方を主題化できるよう、自分自身（主観）をも対象化することなのである。かれは空間もまた、ほかならぬこの基本線に沿って、原文の叙述どおりに主題化していたことが分かる。

なるほど、いま問題にしている箇所は、第二版で「この〔空間という〕概念の形而上学的究明」と題された節からの引用であるから、後に続く「空間という概念の超越論的究明」と題された節とは内容を異にし、主観をも対象化する超越論的な認識の、たかだか下準備に相当する論述内容にすぎないと考えられるかもしれない。とはいえ、カントの用語法に従うかぎり、或る概念に属しているものを明確に示すことが「究明」であり、或る概念を「ア・プリオリに与えられたものとして」叙述する場合、そのように叙述することが「形而上学的究明」である（B38: 強調点省略)。したがって、ここでア・プリオリに「与えられたもの」と述べられている以上、空間は「われわれ人間（主観）に」与えられているものであるから、引用した箇所の内容が実際にそうなっているように、わたしが外部に在る何かだけではなく、同時にまた「わたしが自分自身を見出す ich mich befinde」ということも、空間に属している根本的な特徴として究明されていたのである。

カントは第二版の超越論的演繹で、困難な問題であるとしながらも、考える主観（わたし）が、ほかならぬ自分自身を、考えられている側の客観として認識することについて論じている（B155）。その結論だと思われる箇所（§ 25）を次に引用したい。

Da nun zum E r k e n n t n i s unserer selbst außer der Handlung des Denkens, die das Mannigfaltige einer jeden möglichen Anschauung zur Einheit der Apperzeption bringt, noch *eine bestimmte Art der Anschauung,* dadurch dieses Mannigfaltige gegeben wird, erforderlich ist, so ist zwar mein eigenes Dasein nicht Erscheinung（viel weniger bloßer Schein), aber die Bestimmung meines Daseins kann nur der Form des inneren Sinnes gemäß nach der besonderen Art, wie das Mannigfaltige, das ich verbinde, in der inneren Anschauung gegeben wird, geschehen, und ich habe also demnach keine E r k e n n t n i s von mir w i e i c h b i n, sondern bloß wie ich mir selbst erscheine. Das Bewußtsein seiner selbst ist also noch lange nicht ein Erkenntnis seiner selbst, unerachtet aller Kategorien, welche das Denken eines O b j e k t s ü b e r h a u p t durch Verbindung des Mannigfaltigen in einer Apperzeption ausmachen（B157f.).

ところで、われわれ自身の〔目的語的２格〕認識には、可能な直観それぞれの多様を統覚の統一へともたらす思考の働き以外に、この多様がそれをとおして与えられるところの、或る一定の直観様式もまた必要であるため、わたし自身の現実存在は、たしかに現象ではない（ましてや単なる仮象などではない）けれども、わたしの現実存在の規定は、内的感覚器官の形式に適合してのみ、しかも、わたしの結びつける多様が内的直観というかたちで与えられる特殊な様式に従ってのみ、なされうるのであり、それゆえまた、わたしが存在するとおりにではなく、ただ、わたしがわたし自身に現れるとおりに、わたしは自分自身についての認識をもつ〔自分自身について認識する〕のである。したがって、自己の意識は自己の認識からまだ程遠いのであり、しかもこの点は、一なる統覚のうちで多様を結びつけ、そのことによって何らかの客観一般の〔目的語的２格〕思考をかたちづくる〔何らかの客観一般を考える際に必要な〕

諸カテゴリーすべてに与かろうともなお変わらない。

注目したいのは、存在するとおりの「わたし」（主観）が認識できないという点ではなく、現れるとおりであれば、客観的な「自分自身についての認識」が、われわれには可能であるという点にほかならない。そして、カントは客観的な自己認識に不可欠な「或る一定の直観様式」として内的直観の様式をあげている。しかし、自己認識が自己の客観的な認識であるかぎり、次節で内的感性的直観と外的感性的直観の根源的な関係について示すように、かれは先ほど検討した空間の特性も、すなわち「わたしの外部に在る何か」だけでなく、同時にまた「わたしが自分自身を見出す」といった特性も、言外で想定しているのではないだろうか。

第 18 節　諸部分すべての内なる多様（？）

さらに、超越論的演繹には、感性論に言及した重要な指摘が見られる。その一つを見ておこう。

> Der Raum und die Zeit und alle Teile derselben sind A n s c h a u u n g e n, mithin einzelne Vorstellungen mit dem Mannigfaltigen, das sie in sich enthalten (siehe die transz. Ästhetik), mithin nicht bloße Begriffe, durch die eben dasselbe Bewußtsein, als in vielen Vorstellungen, sondern viel Vorstellungen als in einer, und deren Bewußtsein, enthalten, mithin als zusammengesetzt, folglich die Einheit des Bewußtseins, als s y n t h e t i s c h, aber doch ursprünglich angetroffen wird. Diese E i n z e l n h e i t derselben ist wichtig in der Anwendung (B136Anm.).

空間と時間、ならびに空間と時間のあらゆる諸部分〔空間の諸部分および時間の諸部分〕は諸直観であり、したがって、それら〔空間と時間、ならびに空間の諸部分および時間の諸部分すべて〕が、それら自身の内に含んでいる多様を伴った個別の諸表象なのである（超越論的感性論を参照）。したがって、空間と時間およびそれらのあらゆる諸部分は、同一の意識が多くの諸表象の内に含まれている〔と見出される〕単なる諸概

念ではなく、むしろ多くの諸表象が一つの表象の内に、しかもそれら諸表象の意識のなかに含まれている〔と見出される〕ため、それら多くの諸表象は合成されている〔と見出される〕のであるから、意識の統一は総合的でありながらも、なお根源的なものとして見出されるのである。空間と時間、ならびに空間と時間のあらゆる諸部分のこうした個別性〔いずれも多様を伴う個別の表象であるということ〕は、適用に際して重要である。

感性論の参照を促すこの指摘から、空間と時間は多様を伴い、多様をそれら自身の内に含んでいることが判明する。しかも、それだけではなく、空間も時間も個別の表象である。さらに、空間と時間はどの部分をとっても、その部分には同様に多様が伴っており、いずれの部分も例外なく、それ自身の内に多様を含む個別の表象なのである。たしかに、これでは最早イメージ困難どころか、不条理そのものかもしれない。また、これほど不可解な個別性が重要であると指摘されている「適用」として、いったいどのような適用の仕方が想定されているのか。いずれも意味不明というほかない。しかし、真相に迫るためには、カントが語っているとおりに理解できなければならないだろう。

超越論的演繹のなかには、いま確認したのと同質の不条理さを伴う叙述が他にもあるので（§ 26 ）、それも引用して検討することにしよう。すでに引用して訳出した箇所を含むが、新たに判明したことも考慮しながら、重複を厭わずに、できるだけ正確に改訳したい。

Wir haben F o r m e n der äußeren sowohl als inneren sinnlichen Anschauung a priori an den Vorstellungen von Raum und Zeit, und diesen muß die Synthesis der Apprehension des Mannigfaltigen der Erscheinung jederzeit gemäß sein, weil sie selbst nur nach dieser Form geschehen kann. Aber Raum und Zeit sind nicht bloß als F o r m e n der sinnlichen Anschauung, sondern als A n s c h a u u n g e n selbst（die ein Mannigfaltiges enthalten）also mit der Bestimmung der E i n h e i t *dieses Mannigfaltigen in ihnen* a priori vorgestellt（siehe transz. Ästhet.）. Also ist selbst schon E i n h e i t d e r S y n t h e s i s des Mannigfaltigen, außer oder in uns, mithin auch eine V e r b i n d u n g,

der alles, was im Raume oder der Zeit bestimmt vorgestellt werden soll, gemäß sein muß, a priori als Bedingung der Synthesis aller Ａｐｐｒｅｈｅｎｓｉｏｎ schon mit(＊) (nicht in) diesen Anschauungen zugleich gegeben. Diese synthetische Einheit aber kann keine andere sein, als die der Verbindung des Mannigfaltigen einer gegebenen Ａｎｓｃｈａｕｕｎｇ ｕｂｅｒｈａｕｐｔ in einem ursprünglichen Bewußtsein, den Kategorien gemäß, nur auf unsere ｓｉｎｎｌｉｃｈｅ Ａｎｓｃｈａｕｕｎｇ angewandt. Folglich steht alle Synthesis, wodurch selbst Wahrnehmung möglich wird, unter den Kategorien, und, da Erfahrung Erkenntnis durch verknüpfte Wahrnehmungen ist, so sind die Kategorien Bedingungen der Möglichkeit der Erfahrung, und gelten also a priori auch von allen Gegenständen der Erfahrung (B160f.).

（＊）B.Erdmann: Apprehension mit.

われわれは空間と時間の諸表象に外的感性的直観と内的感性的直観のア・プリオリな諸形式を有している。そして、覚知の総合そのものが、後者〔時間〕の形式に従ってのみ起こりうるのであるから、現象の多様を覚知する総合は常にこれら〔諸形式〕に従わざるをえない。しかし、空間と時間は、単に感性的直観の両形式としてだけではなく、さらに（何らかの多様を含む）諸直観そのものとして、それゆえ諸直観の内でこの多様を〔目的語的２格〕統一している規定もろともア・プリオリに表象される（超越論的感性論を参照せよ）。このように、われわれの外であれ内であれ、多様を総合する統一でさえすでに、したがって空間または時間の内で規定されて表象されるべきすべてのものが適合せざるをえない結合もまた、あらゆる覚知を総合する条件としてア・プリオリに、これら諸直観の（内にではなく）、これら諸直観と共に、しかも同時に与えられているのである。ところが、この総合的統一は或る一つの与えられた直観一般の〔説明の２格〕多様を、一なる根源的な意識のなかで、諸カテゴリーに従いつつ、われわれの感性的直観にのみ適用されて結びつけている統一の他ではありえない。それゆえ、知覚〔するということ〕さえも可能にしている総合はすべて、諸カテゴリーのもとに立ち、さらに、経験とは結合された諸知覚をとおして認識することであるから、諸カテ

ゴリーは経験が可能であることの諸条件であり、かくして経験の、ありとあらゆる諸対象についてもまた、ア・プリオリに妥当するのである。

訳出にあたって、ゲシュペルトによる強調は原典に従いつつも、B・エアトマンの校訂案を採用した。しかし、校訂案についての詳細な検討はともかく、カントはここでも超越論的感性論を参照するよう指示している。それゆえ、まず間違いなく、超越論的感性論の内容を前提に、かれは経験の諸対象に対する諸カテゴリーの妥当性（客観的妥当性）を論証しようとしていたのである。

カントによると、外的感性的直観のア・プリオリな形式は空間であり、内的感性的直観のア・プリオリな形式は時間にほかならない。すでに本研究ノートの第15節で確認したように、空間は外的対象（現象）だけの形式である一方、時間は内的対象（現象）の形式であることに加え、間接的に外的対象（現象）の形式でもあるため、対象（現象）全般に及ぶア・プリオリな形式であった。そして、われわれがたとえば、外的現象の一例である「水の凍結」を知覚する場合、液体であった状態と固体になった状態とが、或る時間関係で互いに対立するものとして「覚知される sich apprehendieren」（B162）など、覚知の総合は時間に従ってのみ起こりうる。しかし、そもそも変化が変化として知覚されるためには、変化を測る不変のものが不可欠である。その一方で、内的感性的直観のうちには、不変のものが何もない。このため、われわれの内的な変化さえ、内的現象の多様が総合されて覚知されるにあたっては、たとえば線を引いてみるその他、外的感性的直観で内的感覚器官の形式（時間）を不変のものへと形象化することで、自分たち自身の「継起的な現実存在」が分かるようにするほかないのである（B292; vgl.B154）。それゆえ、現象の多様を覚知する総合は、外的現象でも内的現象でも常に、空間と時間の両形式に従っている。最初の指摘はこうした趣旨だと理解してよいだろう。

以上に加え、空間と時間が多様を含んでいるという点は、直前に検討した引用箇所と同じ指摘である。また、空間と時間は感性的直観の両形式としてだけでなく、諸直観そのものとしても、ア・プリオリに表象されると主張されている。これも確認ずみの論点にすぎない。さらに、多様を含む諸直観（空間と時間）の内で、当の多様を統一しているのは、カントの基本設定にもとづくかぎり、受動的な感性ではなく、悟性の能動的な働きだ

と考えられる。それゆえ、感性に対する働きかけによって悟性が多様を統一している規定もろとも（mit der Bestimmung der Einheit）、かつまたア・プリオリに、感性的直観の両形式（空間と時間）が表象されるという点は、たとえばア・プリオリに表象されると指摘されているこの「規定」を、悟性が感性に働きかけて空間や時間を特定の直観的表象として成り立たせた「形跡ないし痕跡」と解釈すれば、かれの基本設定と合致しているといってよいだろう。

しかし、空間または時間の内で規定されて表象されるべきものすべてが適合せざるをえない「結合」もまた、空間の直観および時間の直観と共に、しかも同時に与えられているとは、いったいどのような事態なのであろうか。前記のように、参照が求められている超越論的感性論の内容が前提になるとはいえ、そもそも当の前提が何であるのか不明というほかない。それでも、できるだけ論理が見えやすくなるように、時間についてはひと先ず省略し、空間についてだけ、意味不明の論点をまとめておこう。

空間の内で規定されて表象されるものが適合せざるをえない結合は、空間の直観と「共に」与えられているのであり、直観の「内に」与えられているのではない。直前に検討した箇所では、空間と時間、ならびにそれらのあらゆる諸部分が多様を伴い、それら自身の内に多様を含んでいると指摘されていた。ところが、今度は、これとは別に、何らかの結合が空間の直観と「共に」与えられているといった指摘になっている。さらに、訳文中で「諸直観の内でこの多様を統一している」と訳出されている箇所は、直訳すると「諸直観〔空間と時間〕の内なるこの多様の統一 Einheit dieses Mannigfaltigen in ihnen」である。これはすなわち、本研究ノートの冒頭で問題にした感性論の「空間における〔空間の内なる〕多様 das Mannigfaltige in ihm」と、ほぼ完全に同型の表現なのである。しかし、同じページに注記があるので、それも引用して訳出し、解釈の手掛かりが他にもないか確認したい。

> Der Raum, als G e g e n s t a n d vorgestellt,（wie man es wirklich in der Geometrie bedarf,）enthält mehr, als bloße Form der Anschauung, nämlich Z u s a m m e n f a s s u n g des Mannigfaltigen, nach der Form der Sinnlichkeit gegebenen, in eine a n s c h a u l i c h e Vorstellung, so daß die F o r m d e r A n s c h a u u n g bloß Mannigfaltiges, die

f o r m a l e　A n s c h a u u n g aber Einheit der Vorstellung gibt. Diese Einheit hatte ich in der Ästhetik bloß zur Sinnlichkeit gezählt, um nur zu bemerken, daß sie vor allem Begriffe vorhergehe, ob sie zwar eine Synthesis, die nicht den Sinnen angehört, durch welche aber alle Begriffe von Raum und Zeit zuerst möglich werden, voraussetzt. Denn da durch sie（indem der Verstand die Sinnlichkeit bestimmt）der Raum oder die Zeit als Anschauungen zuerst g e g e b e n werden, so gehört die Einheit dieser Anschauung a priori zum Raume und der Zeit, und nicht zum Begriffe des Verstandes.（§ 24.）（B160f.Anm.）

空間は（実際に幾何学で必要とされているとおり）対象として表象され、直観の単なる形式以上のものを、つまり感性の形式に従って与えられる多様を何らかの直観的表象に統合することも含んでいるため、直観の形式が単に多様を与える一方、形式的直観は表象の統一を与えているのである。わたしは感性論でこの統一を感性にだけ数え入れていた。それはただ、空間と時間の諸概念すべてを初めて可能にし、感覚諸器官には属していない或る総合が、たしかにその前提になるとはいえ、この統一があらゆる概念に先立つことを注記するためであった。なぜなら、この統一により（悟性が感性を規定することで）初めて、空間または時間が諸直観として与えられるため、このア・プリオリな直観の統一は空間と時間に属しているのであり、悟性の概念には属していないからなのである（第 24 節）。

空間は対象としても表象される。カントは幾何学をその実例としている。この指摘は非常に分かりやすい。直観の形式は単に多様を与える。これはすでに確認ずみの論点である。しかし、空間は感性の形式に従って与えられる多様を含むだけでなく、与えられる多様を何らかの直観的表象へと統合することもまた含んでいる。これは新たな論点である。形式的直観なるものが、表象の統一を与えているのであり、その統一は感覚諸器官には属していない或る総合を前提にしてなされているのである。この「形式的直観」という語は、後に「反省概念の多義性」（A268/B324）と「第一アンチノミー」（A429/B457Anm.）で用いられているけれども、その前提となる「感覚諸器官には属していない或る総合」こそが、空間の「内に」ではなく、

空間と「共に」与えられている「結合」ではないかと推定される。

カントによると、形式的直観は表象の統一を与えるとはいえ、あらゆる概念に先立つ。かれはこう明言している。はたして、受動的であるはずの感性的直観に、総合や結合が帰されてよいのだろうか。まずはこの点が気になるところである。とはいえ、慎重に読み返してみると、カントは総合が「感覚諸器官には属していない」と指摘した後、総合や結合が感性的直観に「由来する」とは述べていない。かれはただア・プリオリな直観の統一が「空間と時間に属している」と主張しているだけである。そして、よく考えてみれば、由来と所属は同じでない。しかも両者は何らかの仕方で重なる必要さえない。実際、総合や結合が能動的な悟性に「由来する」としても、その成果に相当するア・プリオリな直観の統一が、統一の（諸）形式として空間と時間に「属する」ことは、何ら妨げられないのである。この点に注意すると、総合は感覚諸器官に由来しないだけでなく、属してさえいないと理解されていたことも分かる。他方、形式的直観によって与えられる（直観的）表象は、悟性の概念にではなく、あらゆる概念に先立って空間――および時間――に属している。だからこそ、カントは感性論で、その統一を「感性に数え入れていた」のである。さらには、問題であった箇所も、この文脈で自然に読み解けるのではないか。「空間または時間の内で規定されて表象されるべきすべてのものが適合せざるをえない結合もまた、ア・プリオリにあらゆる覚知を総合する条件として、すでにこれら諸直観の（内にではなく）、これら諸直観と共に、しかも同時に与えられている」（B161：強調点は引用者によるもの）。

以上で「諸空間一般」の真相を突き止めるための手掛かりは出揃った。謎解きの突破口となるのが「形式的直観」である。しかし、その最終的な謎解きに着手する前に、必要な諸論点を整理し、ここまで先送りにされている諸問題を再確認しておきたい。

第 19 節　構造体としての「諸対象一般」と「諸空間一般」

空間は唯一であり、空間の内なる多様も、したがってまた「諸空間一般」の一般概念も、ただ複数の制限による。カントは感性論でこのように明言していた。しかし、かれが明言していることの意味を、唯一の空間内部に多様な部分空間が併存していると解釈するのは、少なくとも一般概念の成

立条件にもとづくかぎり、完全に的を外していたのである（第1節）。また、かれによると、直観は無際限に進展するのであり、そもそも諸関係の概念は諸関係が無限であるという原理をもち合わせているのであった。それにしても、いったいどのようなことを、カントは「進展」と呼んでいるのだろうか。諸関係とはそもそも何を指しているのか。さらに、諸関係が無限であるというのは、どのような事態なのか。これらはまだ解明されていない。いずれも本研究の第1節から持ち越しになっていた問題である。

次に、第二版の感性論のなかで初版から書き換えられた文面を細かく検討した結果、その書き換えには微妙でありながら、かなり重要な意味があるのではないかと推定された。検討から判明したのは、諸現象の多様が感性的な諸直観一般の純粋形式で自ずと直観される、つまり、多様が複数の現象から成るのであれば、その多様は自ずと直観されるのに対して、多様が単数の現象である場合、現象の形式はその多様が複数の関係で秩序づけ「られうる」よう促すにすぎないということである（第4節と第16節）。ここで、秩序づけを促す「複数の関係」とは、文脈に沿って読み取ると、前の段落で示した未解明の「諸関係」にほかならないため、書き換えられた箇所で述べられていることは、無際限に進展する直観の真相と密接に関連していると予想された。しかし、現象（単数）であれ現象の多様（単数）であれ、さらには諸現象の多様（単数）それぞれであれ、単数のものが複数の関係で秩序づけられるというのは、いったいどのようなことであるのか。この問題も現時点まで、まったく意味不明のまま、先送りにされていたのである。

さらに、数学の認識はカントによると、普遍的に成り立つ事柄を個別の一例でア・プリオリに考察する。この指摘は実のところ、すでに輪郭を現した「或る一つの ～ 一般」が概念の普遍性に到達する事態と表裏していたのである。しかも、同じこの指摘はおそらく、際限のない直観の進展という上記の問題とも関連しているのであった（第10節）。とはいえ、これは単なる推測であり、どのように関連するのかは判明していない。また、カントは初版の超越論的演繹のなかで、ただ一つ「でない」（複数の？）経験を反実仮想しているという異様な問題も、ほとんど手つかずの状態で残されている。解釈を進めるためには、この反実仮想に意味があるとすれば、それはどのような意味であるのかを突き止めなければならないのである。この一ならざる経験、および一ならざる意識という謎は、おそらく「空間

の内なる多様」ならびに「諸空間一般」と同根の難問ではないだろうか。第 12 節ではそのように予想した。しかし、予想しただけであるから、当然、その真相はこれから解明しなければならない課題にとどまっている。さらに、空間と時間、ならびに空間と時間のあらゆる諸部分の「個別性」が、カントによれば「適用に際して重要」なのであった（第 18 節）。はたして、かれは何をどのような意図で、こう指摘しているのだろうか。これもまた現時点ではまったく不明である。

他方、まだ完全ではないながらも、検討をつうじて判明しつつある論点も少なくない。たとえば、副詞「一般」を伴う複数形の名詞や名詞句の意味について詳しく調べてみたところ、カントは「諸知覚一般」が「われわれの可能な全経験に属している」ことを当然視していた。かれによると、単に経験が成立するのとは異なり、経験認識が成立するためには、複数の対象と複数の概念が不可欠なのである。さらに、かれが理解している「諸対象一般」の性格は、構造体としての「諸知覚一般」だけでなく、本研究の主要問題である「諸空間一般」とも、不思議なほど含意が一致しそうであった（第 16 節）。また、存在するとおりの「わたし」ではなく、現れるとおりの「わたし」であれば、客観的に認識できると、カントは理解していたのである。しかも、かれはこの認識を超越論的認識の機軸にしていた。われわれは諸対象を認識するだけでなく、自分自身（主観）をも対象化して認識するため、われわれが諸対象について認識する仕方を主題化し、その仕方を超越論的に認識することが、われわれ人間にはできるのである。そして、カントは早くも超越論的感性論の段階から、外部に在る何かを見出すことに加え、同時に「自分自身を見出す」ことが、空間に属する根本的な特徴にほかならないと考えていた（第 17 節）。

判明しつつある論点は他にもある。たとえば、空間は常に多様を伴い、多様をそれ自身の内に含んでいる。しかも、空間は個別の表象であり、どの部分をとっても、その部分には同様に多様が伴い、空間のあらゆる部分がそれ自身の内に多様を含む。そして、空間の直観と共に、何らかの結合が与えられているとも指摘されていた。さらに、カントが語っていた「諸直観〔空間と時間〕の内なるこの多様の統一 Einheit dieses Mannigfaltigen in ihnen」は、感性論に見られた「空間の内なる多様 das Mannigfaltige in ihm」と、ほとんど同型の表現だったのである（第 18 節）。たしかに、以上の諸論点は、どの一つをとっても不条理としか思えない内容であ

る。しかし、それらはいずれも、避けて通ることのできない解釈の障壁であると同時に、カントが洞察した空間の真相に迫るための貴重な手掛かりでもあるに違いない。そして、以上で判明しつつある諸論点のなかでも特に注目したいのは、表象の統一を与えるとはいえ、あらゆる概念に先立つ「形式的直観」が、感覚諸器官には属していない「或る総合」を前提にして成り立つと述べられていた点である（第 18 節）。

カントが理解していた「諸空間一般」とはいったい何か。この問題を解明するためには、以上の諸論点にもとづいて、持ち越しになっている数多くの難問を、すべて解き明かさなければならない。次節からそれを試みる。

（つづく）